

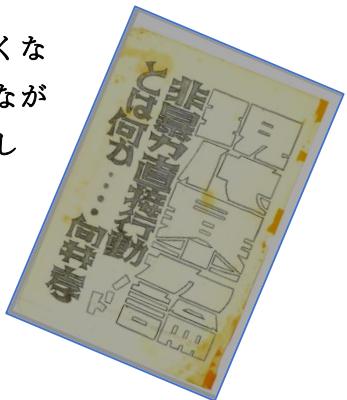
続・極私的市民運動の記録

<その1>市民運動と印刷機たち

(最終的に縦書きの本になるので?、漢数字を使うことにする)

●はじめに

コロナのとき、ごろごろしているのもしゃくなので、『極私的エッセイ－コロナと向き合いながら』（社会評論社、二〇二一年二月）を出しました。以下の七話です。極私的な市民運動の記録で、お役にたったのかどうか自信がありません。



- ・ ベ平連神戸事件顛末の記
- ・ 阪神淡路大震災の記録
- ・ コリア・コリアンをめぐる市民運動
- ・ 南京への旅・ツアコンの記
- ・ 「青丘文庫」実録
- ・ 「六甲古本市」全?記録
- ・ ゴドウイン裁判－初・原告団長の記

でも、書いておくことも意味あることだと考えることにして、「続編」を書くことにします。おつきあいをよろしくお願いします。

●ガリ版

続・市民運動の記録＜その一＞がなぜ印刷機なのか？

市民運動に七つ道具があるのかどうか知らないが、印刷機は、その一、二の地位を占める（と思う）。

私は、ガリ版に小学校のころからなじんでいた。私は一九五〇年生まれだが、小学校のプリントほとんどがガリ版刷りだった。もちろん試験問題もだ。当時の先生はみんな？ガリ版が上手だった。

ガリ版は、「ろう（蝶）原紙」を専用の鉄板の上において、鉄筆で書く。ほんとに、ガリガリと書くのだ。その音はどう聞いても「ガリガリ」としか聞こえない。中学校のころ、ガリ版で自作の名刺を作ったことがある。当時通っていた神戸多聞教会で印刷したと思う。キャンプソング集なども作っていた。なつかしい。名刺は残っていないが、先日ごそごそとしていたらそのキャンプソング集はでてきた。

大学に入った一九六九年。やはりガリ版の時代だ。当初神戸大学内にあったペ平連神戸の事務所で、私はたくさんのビラ、通信を作った。すべてガリ版だ。

ガリ版は、ろう原紙に鉄筆で「傷」をつけていくのだ。その傷を通過するインクが字となるのだ。見たことのない人には分からないと思うが、この説明もけっこうむつかしい。

普通の大きさの字は問題がないが、大きな字を書くときにはテクニックがいる。原紙が破れてしまうのだ。

大きな題字、見出しへそれ用の鉄筆で書く。普通の字は普通の鉄筆。ろう原紙の大きさは四ミリ方眼。三・五ミリもあった。三ミリの字を書くつわものもいた。多聞教会で週報を作っていた高

木清夫さんは、ガリ版の名手で、三ミリ方眼で書いていた。左右の線は、定規を使っていた。画数の多いのは適当に省略するのだという。「讃美歌」の「讃」など、一本省略しても分からない？

印刷がまた手工業そのものだ。ローラーにインクをつけて、ガリ版原紙をはりつけたスクリーンを一面に塗り、印刷していく。上級者になるとそのスクリーンをゴムで天井のどこかにつけて、インクをぬったら自動的にスクリーンが上がっていくようになる。その間にすばやく刷りあがった紙を抜く。一秒間に三枚ぐらい刷れると免許皆伝。私は二枚ぐらいいけたかな？

が、その原紙は熱に弱い。夏は千枚ぐらいで原紙が破れてしまう。だましだまし印刷しても完全に破れてしまうともう一度ガリ版の書き直し（切り直し）だ。精神的にまいってしまう。前日にガリ版が完成したときには冷蔵庫に保管するのだが、それでも破れるときには破れる。

私たちのガリ版の先生は、向井孝さんだった。姫路在住の詩人、アナキスト。雑誌『自由連合』などを発行していた（本文最初の『現代暴力論ノート』も）。絵も上手だった。向井さんはなんでも創意工夫の人で、キセル乗車の先生でもあった。東京行の、切符の日付を鉛筆で修正した切符をいただいたこともある。もちろん、使った。なぜそんな切符が残っているのか。残しかたは、目的地の先までの切符を買って東京駅で途中下車をするのだった。私もお礼にそのように切符をのこして、向井さんにさしあげたことがある。

べ平連神戸には、西信夫さん、堀内稔さんらガリ版の上手な人もいた。なかでもすごかったのが西さんの同級生・清水建宇さんだ。字がきれいなだけではない。B版縦書き五段組のチラシ。最初に大きなタイトルを書く。次に五段の適当なところに中見出し

を書く。その後、文章を埋めていくのだ。それも、原稿なしで直接書くのだ。すごかった。そのチラシを今回、ライブラリーでさがしてみたが見つからなかった。残念。清水さんは、元朝日新聞の記者。久米宏の「ニュースキャスター」にもコメンテータとして出演していた。退職後はスペインバルセロナで豆腐屋さんをしたというのがすごい。『バルセロナで豆腐屋になった一定年後の「一身二生」奮闘記』(岩波新書)を書いている。私はすぐに買って読んだ。おもしろかった。

ガリ版印刷は、手工業的な一秒〇枚の印刷から、輪転機に変わった。でも、ろう原紙の破れ現象からはのがれられなかつた。

さて、ガリ版でまちがつたときはどう対処したか？ 思い出したので忘れないうちに書いておく。専用の修正液があった。赤チンのような入れ物にはいったものだ。色も赤い。それを塗ってしばらくしてから書くのだ。ますますボロボロになる場合もあるが、それで訂正する。その修正液がないときはどうするか？ これは母・飛田溢子から習ったような気がするが、ロウソクを使う。その「ろう」をまちがつた個所に塗り付けて、マッチの火でその部分を溶かす。失敗すると原紙を燃やしてしまうので超危険だがよくやっていた。

さらに思い出したので、忘備録。青焼きコピーと電子コピーがあった。青焼きは、当時、設計図面などはほとんどそれでコピーしていたもので、トレーシングペーパー（透き通った紙）で製図図面を書き、それを青焼きするのだ。小型のものが学生センターに事務所をおく六甲カウンセリング研究所にまず入った。使わせてもらった。現像液？を通すので濡れたコピーがでてくる。机の上にひろげて乾かした。学生センターもそのうち買った。むくげの会の朝鮮語講座（一九七一年～）でも、その青焼きを使ってい

た。ゼロックスは高いので、一枚ゼロックスコピーして、あとは、それに透明になる液体をスプレーして青焼きコピーした。分っていただいたかな？

電子コピーは、店のコピーにはあった。全体に灰色がかった色になる。難点は二、三年したら文字が見えなくなることだ。学生センターライブラリーに文字が読めない貴重な電子コピーの資料がいまもある？

さらについてで、朝鮮語講座のテキストでは、カーボンコピーも使った。紙の間に黒いカーボンを挟んで、強くボールペンで書くのだ。私は筆圧が強いので、五枚くらいいけた。事務局長的しごとのひとつは、手紙を書くときは必ずこれを使って写しを残しておくことだったのだ。当時、学生センターにあったゼロックスは、畳二畳ほどの大きさがあり、一枚二〇円もしていたのではないかと思う。高かったのだ。ハワイから来た宣教師のロナルド・藤好さんが、そのゼロックスをよく使っていた。それも国際郵便用なのか、両面コピーするものだから、よくトラブルを起こしていた。

● 「ファックス」

ガリ版の次は、ファックスだ。このファックス、電話／ファックスのファックスではない。ガリを切るかわりに鉛筆などで版下をつくり、それをファックスで焼き付けるのだ。幅一メートルくらいのファックス機にローラーがある。ローラーの右の部分に手書きした原版を巻き付け、左の部分にファックス原紙をいれる。そしてスイッチオン。グルグルと回りだし十分ぐらいしたら、出来上がる。そのファックス原紙を輪転機に入れて印刷する。ファックス時代にはといって、見出しが楽になった。マジックで書けばい

いのだ。絵を貼り付けてもいい。（写真用にモザイク？を入れる専用のものもあったなあ。）

ファックスの場合は、なんらかのトラブルで印刷原紙が破れても原版があればもう一度焼き付ければOKだ。

ガリ版からファックスへの移行期、むくげ通信にもトラブルがあった。我々はまだファックスをもっていなかった。途中でガリ版原紙が破れた。もう一度ガリを切る元気はなかった。当時、明石教会の加辺牧師のところにファックスが入っていた。そこまですでに印刷していたものを持参し、ファックスでファックス原紙を作ってもらった。また事務所まで引き返し続きを印刷した。その日中に通信は完成した。うれしかった。（むくげの会の連絡先は私の自宅。通信の印刷は三宮のベ平連神戸でていた。それが一九七八年、飛田の学生センター就職を機に学生センターに移った。真夏のベ平連神戸事務所での印刷作業はつらかった。地球温暖化がいまほどではなかったものの、灼熱地獄だった。）

今のファックス、原理はこのファックス印刷機と同じだ。電話回線をとおして、文字情報をくり返し、相手方で焼きつけるのだ。

私の友人で聾（ろう）の在日コリアン・陳さんがいた。電話のファックスが普及しはじめたころ、彼に銀行で久しぶりに会った。嬉々としてファックスが聾者にどれほどの恩恵を与えていたかを語ってくれた。ほおーー、と感心して聞いた。陳さんいまどうしているだろう。

鉄筆とガリ版用の鉄板。私は長いあいだ保管していた。世の中がすすんでも原始的な技術を市民運動としては確保しておかなければならぬ、という使命感？があった。いつか陽の目を見るかもしれない。が、それは、なかつた。一九九〇年ごろ、すべて博物館に寄付したらよかつたか。

明石にガリ版印刷所が残っているというニュースが年賀状のシーズンに新聞で見たことがある。その会社に貴重なろう原紙を寄付したような記憶もある。

むくげ通信もある時期にファックスになり、パソコンになった。が、むくげの会でのガリ版名人は鹿嶋節子さんと信長正義さん。このふたりはガリ版でもパソコンにそん色はなかった。が、真っ先にパソコンになったのは、信長正義さん。一番遅れたのは、もっとも早くパソコンに転向すべきであった、悪筆の山根俊郎さんだった。世の中、ままならない。私の当時のガリ版もまあまあの方だった。が、今、手書きの編集後記の私の字はすこぶる評判が悪い。（実は、ガリ版とファックスの間にもうひとつある。それは、「ボールペン原紙」だ。ガリのかわりにボールペンで書いたら印刷原紙ができる。それを輪転機にかけるのだ。ガリよりだいぶ楽だ。この情報、Facebookへの投稿に返事のあった先輩より。）

●「宛名専用ガリ版」

横四センチ？、縦一二、三センチ？のガリ版があった。宛名専用だ。学生センターにあった。普通のガリ版のように住所名前を書く。そのカードのような原紙を専用の機械で封筒などに印刷するのだ。これも手工業的なものだが、当時としては画期的なものだ。セミナーの案内を二、三百人に送るときこれが頼もしい味方だった。

でも、朝鮮史セミナー、食品公害セミナー、キリスト教セミナーごとに宛名カードがあり、分類整理に手間がかかった。でもそれでも、よかったです。

当時、宛名書きは、基本は手書き。一九七〇年代、申京煥裁判にかかわっていたころ、すでに退職していた父・飛田道夫がそれ

をしてくれていた。二百人程度の宛名をニュース発行の度ごとに書いてくれた。感謝感謝だった。むくげ通信の宛名もある時期まで、みんなで分担して書いた。

宛名印刷、住所管理の方法の変化については、次章「市民運動とパソコン」で詳しくのべる（つもりである）。

●リソーグラフの登場

学生センターにリソーグラフ印刷機が入った。理想科学工業のものだ。「プリントごっこ」年賀状が一世を風靡したことがあったがその会社のもので、その上位機種だ。

そして、印刷機としてのファックスは駆逐された。輪転機としては、リソーグラフ以外に、リコー、デュポン？などもあった。オフセット印刷機もあったが高価なもので、印刷技術レベルおよび値段が高い。それに、音量が高い。某党派がそれを使って、総スカンをくったという話もある。

学生センターは、印刷物がけっこう多い。第一電子がコピー機、印刷機などをリースしている。

センターは、普通の小学校が使う分量より多く印刷しているという。新しい機種ができると直ぐにデモンストレーションにやってくる。カラー印刷機もデモがあった。ふむ、なかなかいい。

「リース料そのままで新しい機種を納品させてください」

OKとなる。こんな感じで、そして、どんどん？新しい最新の機種が入ってきた。

二〇年ほど前、画期的な、帳合／製本を自動でする機種が入った。すごいのだ。

一九七一年から隔月で発行している「むくげ通信」は二八頁の冊子だ。従来は、もちろん印刷してから、帳合／製本する。印刷

は、一頁と二八頁を印刷しその裏に二頁と二七頁を印刷する。そのようにして、二八頁分を印刷して、帳合が始まる。帳合のプロは、むくげの会では堀内さん。早い。机の上に七種類の紙を斜めに上手にずらして置く。それを一枚ずつそろえていくのだ（このあたりも説明がむつかしい）。そして、ホッキスして完成するのである。

新しい印刷機は、それを自動でしてくれるのだ。二八頁分の原稿をそのまま機械に読みこませてスイッチを押すと、帳合しホッキスまでしてでてくるのだ。考えられない。もう、堀内帳合プロの出番は、ない。失礼した。帳合の出番はない。

ホッキスの名手は、私だった。帳合できたむくげ通信を一〇冊ほど左手でつかみ、お札を数えるように親指と人差し指を上手に使いながら、一冊ずつ順送りにしていく。そして右手で機械のように、カチカチとホッキスしていくのだ。私のこの出番もなくなってしまった。

● 簡易製本冊子の花盛り

この自動帳合／ホッキス製本、六〇頁までできるのだ。たとえば六〇枚の用紙を機械にセットしてボタンをおす。するとホッキスまで出来上がる。

そしたら、六〇頁を越える冊子の注文もきた。ふむ。たとえば八〇頁。思案した。同じように印刷する。ホッキスはしてくれないが、六〇頁分と二〇頁に分かれて出来上がって来る。あとはその二つをあわせて、自分でホッキスすればいいのだ。すごい。中綴じのための大きなホッキスも買ってある。

さらに、少々マニアックなテクニックについて書いておくこ

とにする。

たとえば一二〇頁の冊子をつくるとする。一二〇枚を印刷機にのせるといいのだが、頁を入れるのが面倒だ。私は、そもそも頁の入ってない冊子はいやだ。いやだというより、そういう冊子は作ってはいけないと思っている。でもときどきある。実際、頁をまちがわざに入れるのは神経を使うし面倒なことなのだ。

この印刷機には、頁を自動でいれてくれる機能もついている。私は、まずテスト版をつくる。その目次には、目次項目は入っているが頁が入っていない（この辺も文章で説明するのはむつかしい。分ってくれるかな？）

そして、テスト版をとりあえず印刷する。そこには、自動で頁が入っている。そして、その頁数を見ながら目次を完成させるのだ。そして印刷の本番。たいへんな作業をこなしたような冊子ができるのである。最後はあまりにもマニアックな話になってしまった。実地に見学したい人には、現地でご案内する。場所は、学生センターウエスト一〇〇、三階。古本市会場の横だ。古本購入についてにお立ち寄りいただきたい（ちなみにウエスト一〇〇は阪急六甲駅から西へ百メートルのこと。分館のノース一〇は同じく北へ一〇メートルのこと）

このようにして作った冊子が次のようなものだ。

学生センター出版部では、復刻版も含めて次のとおり。

- ・ 浄慶耕造「国産大豆で、醤油づくり」二〇一二年一月
- ・ 大森あい「自給自足の山村暮らし」二〇一二年一月
- ・ 竹内康人「朝鮮人強制労働企業 現在名一覧」二〇一二年一月
- ・ 成川順「南京事件フォト紀行」二〇一二年一月
- ・ 宮内陽子「生徒と学ぶ戦争と平和」二〇一二年二月

- ・ 高作正博「二〇一七年通常国会における改憲論議一転換点としての5月3日ー」二〇一八年六月
- ・ 飛田雄一「阪神淡路大震災、そのとき、外国人は？」二〇一九年六月
- ・ 藤井裕行「歴史の闇に葬られた手話と口話　関東大震災下で起きた「ろう者」惨殺の史実を追う」二〇二三年一一月
- ・ 「松田妙子エッセイ集＜改訂版＞いつか真珠の輝き」二〇二三年四月
- ・ 「強制動員真相究明ネットワーク・ニュース合本 第一分冊」「同第二分冊」二〇二五年四月
- ・ 飛田雄一「あっちの山、こっちの川ーむくげ通信・旅日記ー」二〇二五年四月
- ・ 資料集「アジア・太平洋戦争下・神戸港における強制連行・強制労働ー朝鮮人・中国人・連合軍捕虜ー」、二〇二五年四月
- ・ 資料集 神戸電鉄敷設工事と朝鮮人労働者（1）（2）二〇二五年六月

むくげの会のものは、以下のとおり。

- ・ むくげ通信初期の合本
- ・ むくげ通信総目次集
- ・ 飛田雄一「時事エッセイーコリア・コリアン・イルボン（日本）ー」二〇一八年五月
- ・ 近藤富男「近藤富男・むくげ論考集」二〇二二年四月
- ・ 「猪飼野地域新聞「おなら」復刻版」二〇二四年九月
- ・ 足立龍枝エッセイ集（全四冊）

けっこう乱造ぎみだ。ほかにも、「強制動員真相究明ネットワー

ク」、「神戸・南京をむすぶ会」もけっこう冊子をつくっている。
が、ここでは省略する。

もうこれ以上、印刷機に新しい機能は求めない、と思っている。
が、また業者が「こんな最新機ができました」とセールスにきた
ら、また、「どんなの？」と聞いてしまいそうな私がいる。

飛田雄一「続・極私的市民運動の記録」

＜その1＞市民運動と印刷機たち

2025年8月6日発行

執筆・編集・印刷・発行 飛田雄一（ひだ ゆういち）

〒657-0011 神戸市灘区鶴甲 4-3-18-205

e-mail hida@ksyc.jp
